



中央ウェイ

11月号

「ウクライナの人々との交流」

主幹教諭 谷村隆人

2022年5月と7月に、ウクライナから避難して来られた方々と食事を共にする機会を得て、貴重なお話を伺いました。タクシー運転手やパティシエ、国際手話による観光ガイド、そして陸上競技の選手もいましたが、同年2月のロシアによる侵攻を避けてヨーロッパの隣国に避難し、縁あって日本へ移動してこられました。

2014年のロシアによるクリミア半島併合時からの緊張や、侵攻が開始された朝の街の様子、自家用車で地雷が埋まっている土地を西側の国境に向かって走る行程など、生々しい戦時の様子を丁寧に語っていただきました。なかでも印象的だったのは、本国に残られているご家族のことや、ウクライナ国内にもロシア人がふだんから共存していて、両国同士の方の結婚も珍しいことではないということです。単純な二項対立ではないということが分かりました。また戦禍にある都市のひとつ「マリウポリ」の手話は、魚が泳いでいる様子を表すそうです。この地では魚がたくさん獲れるからだそうです。このお話を聞き、私は大学の卒業旅行で出会った方を思い出しました。

大学4年の冬、卒業を控えた時期に、中東の国々へ一人旅をしました。イランのイスファハーンを訪れた時、公園でパンを食べていると隣に座っていた男性が話しかけてきました。聞くと、アフガニスタンから来た人だと分かりました。その人が言いました。「アフガニスタンのイメージは何だ？ 多分君は『戦争』を思い浮かべるだろう。でもな、俺の国はもともと色とりどりの花が咲く、美しい国なんだ。ぜひ来てみてくれよ。」私は、はっとしました。外から伝わってくる情報だけで、ひとつの国のイメージを単純化してしまっていた自分に気付いたのです。もし外国の方に自分の国のイメージを聞いた時「戦争」だという答えが返ってきたら、悲しくなります。この方と出会えただけでも、旅行に来た甲斐があったと思いました。

9月からの自立活動の授業ではウクライナの文化やスポーツ、観光地などを調べて掲示物を作成してきました。11月2日のウクライナ陸上選手との交流会で掲示するためです。戦争という事実を目をつぶることはできません。しかし、その前に「ウクライナ」「ロシア」という一つ一つの国があり、生活があり、交流があり、文化やスポーツ・芸術が盛んに行われている。その姿を知ることから、交流を始めたいと思います。生徒たちにとって、ウクライナの陸上選手たちと直接出会い、交流できることが何よりの財産になることでしょう。